

C-30 上腕部の形態と上肢の動作域について
昭和女大短大 刑部昭子 O 島田幾世

目的 被服構成と被服の機能性に関しては各分野から検討されているが、今回、上腕部の形態・発達差が上肢の動作におよぼす影響について、着用実験を通して考察するため本研究を行った。

方法 計測期間 1974年4月 被験者を Veracck 示数と更に中学・高校当時クラブでの運動の有・無その期間などを考慮して179名をえらんだ。測定器具はマルチン測定器他、測定部位は長径1項目、周径5項目と体重である。これらの計測値と上腕部：上腕筋・上腕二・三頭筋・三角筋の発達の差があると考えられた被験者をえらんで、着用実験をおこなった。

結果 身長・体重・乳頭囲胸囲において、肥満体型は運動していた方がいづれもC・V値は高い。中間・細長体型は一樣の傾向はみとめられず、体重のみC・V値がやや高かった。上腕囲・上肢付根囲・上腕最大囲は5%の危険率で左・右の差はみとめられず、又運動の有・無の差もあまりみとめられなかった。上腕囲と上腕最大囲は、中間・細長体型に5%の危険率で差をみとめた。

上腕囲と上肢付根囲の差、上腕囲以外の三角筋・三頭筋に上肢の動作域すなわち袖の構成に考慮すべき要因を見い出した。